

次の文章は、江戸時代中期の久留米藩（現在の福岡県南部）を舞台にした物語の一節です。主人公高松庄十郎は、井上村で大庄屋の次男として生まれましたが、十三才の時、疱瘡（天然痘）にかかって九死に一生を得たことから医師を志し、自分を救ってくれた城島町の医師小林鎮水のもとで修業を積んでいます。享保十七年（一七三二）、鎮水に弟子入りして一年が経ち、十五歳になった庄十郎は、正月に元服の祝いを済ませました。読んで、あとの問いに答えなさい。

長雨が止んだのは、五月も終わりに近づいた頃だった。じめじめした天気が一変して、薄日のみに変わった。昼間の暑気が消えた。夜は布団をかぶらなければならず、朝夕の冷え込みには、*1 袷単衣を要した。本来なら、薄い単衣ですむのが六月なのだ。

六月中旬になって、早くも虫害が目立ち出した。虫の多さは、家の中においても分かった。昼間、治療所にもどこからかは入り込んで、患者の周囲を音を立てて飛ぶ。夜、燭台を灯し、先生と共に書物を開いているときにも、火に誘われて集まって来た。

「あちこちの村で、虫追い行事が行われているらしか」

先生が眼で虫を追いながら言う。燭台を消せば書物が読めず、つければ虫が我が物顔で舞い狂う。

「虫追いは、効果があるとでしょうか」

庄十郎が訊く。この頃では、虫追いだけでなく、雨乞い祭も、日和乞いの行事も、^①気休めに過ぎないと思いはじめていた。

「庄十郎、馬鹿にしちやいかん。あの祭で、百姓たちは気落ちせんですむ。じっと家の中で長雨を見つめとったり、虫が舞うのを（ア）眺めとつたら、どげんなるか。気はめげてしまっただけだ。それよりは、村中の者が集まって、ひとつのこつばすると氣勢があがる。庄十郎も、虫追いは見たこつがあるじやろ」

先生も、このところ庄十ではなく、庄十郎と呼んでくれる。

「あります。在所では、麦藁で実盛様の人形ば作って、村人が担いで畦道ば巡ります。実盛ちいうのは平氏の武士で、稲株につまずいて倒れ、それが仇となつて討ち死にしたそうです。その恨みで稲の虫になつたち聞いとります」

「木曾義仲との戦いじやろ。もう、^Aロウシヨウで、白髪は黒く染めて出陣したものの、年には勝てん。稲株でつまずいたのも、年のためじや。ばつてん、ほんな話は、実盛ちいう名が、〈稲の実を守る〉ちいうこつから来るとじやろ」

鎮水先生の話は、庄十郎には初耳だった。

「在所では、藁人形ば担いだ大人たちがこげなぶうに^Bトナえます。

斎藤別当実盛

稲の虫は死んだぞ ほう

後は榮えて えいえいおー

それに榮えて、今度は子供たちが叫ぶとです。

討った討った

稲の虫は討った

あとは榮えて えいえいおー

庄十郎は実際に右手を挙げて言ってみせる。

父に連れられて、*₂ 甚八と一緒に虫追いに出たのは一度しかない。しかし、その声は何度も聞いていた。

「藁人形は村境の所で、焼いてしまおうとです」

「そげなこつで、虫が C タイサンするち思うか」

先生から訊かれて、庄十郎は首を振る。

「そうじゃろ。虫は逃げん。ばってん、子供と一緒にとなえるこつで、虫の恐ろしさが、代々伝わっていく。虫に負けてたまるか。そげん思うて、村人たちの気持はひとつになる。それでよかとよ。何もせんよりは、よか。効果がなち思っても、立ち向かつて行かなかきやならん場合がある。医師の道も同じこつ」

鎮水先生は言い、髪にまとわりつく蠅はえを手で追い払った。

田の虫だけでなく、家の内外の蠅や蚊までも増えていた。*₃ つる婆さんの話では、畑の葉虫や芋虫も例年の三倍はいるという。どこもかしこも虫に占領され、筑後の国全体が虫の国になったと、先生の許もとを訪れる百姓たちが嘆いた。

「村中の者が田に出て、一列に並んで稲の虫は追うとですが、隣の村も同じこつばするので、何にもならんとです。竹竿たけざおで稲たば叩いて虫を追って、埒ちちは明きまっせん。結局、稲の葉にのぼつてくる虫は、藁ほうきで、竹筴たけざらに掃き取るしかなかです」

「稲の葉一本一本ば、掃くとか」

鎮水先生が驚く。

「*₄ 水呑み百姓は、それしかなかです。多少、金に余裕のある者は、辛子（菜種）油ば藁ほうきにつけて、稲を打とりします。さらに金持ちの長百姓は、鯨油おきば田に撒いて、藁ほうきで葉についた虫ば、払い落とします。落ちた虫は油で死ぬとですが、油代が馬鹿になりまっせん。あつしたちにできるこつは、せつせと稲の葉は掃いて、虫ば集めるだけです。それば畦道に叩きつけて、足で踏み殺します。一枚の田で、虫が*₅ 一斗ぐらい採れます。見ただけで恐ろしゅうなります。これで、今年は飢え死にする者が、絶えんでつしよ」

腹が異様に膨れ上がったその百姓は、言い残して帰って行った。

「あの患者、飢え死にを心配しとったが、その前に、病で命を落とすじやろ。もう痩せがはじまっとる」

次の患者をD マネき入れる前に、先生は声を低めた。「これから先、庄十郎も、この病は見るじやろ。初めは、皮膚のかぶれでやってくる。そのうち腹が膨れてくる。そのあと痩せ細って、最期は血を吐いて死ぬ。不思議に、病人は、山手の方からは来ん。みんな川筋の村に住んどる者ばかりだ。井上村では、そげな病人、見らんかったか」

「知りまっせん」

父からそういう話は聞いたことがない。

「たぶん、病人はおるじやろ。そのつもりで見らんと、見えてこん。目ちいうもんは不思議なもんで、^②見えても見えんこつのほうが多か」

先生は疲れた顔で言い、庄十郎にその日最後の患者を入れるよう命じた。

その患者も、在所で田腐れが広がっている旨を先生に告げた。

「これで、もう秋作は駄目でっしょ。畑のほうは多少収穫があっても、稲は誰もが諦めとります。こん先、診療所にも病人が押しかけて来るはずです。薬よりも、食い物を欲しがる病人が、（イ）かもしれません」

男は^③皮肉な言い方をした。「飢え死にというのは、本人も辛かでしょうが、見る者も辛かです。十日ばかり前、母と子の行き倒れがあつて、村の者で葬ってやりました。着物はぼろぼろ、母も子も痩せ衰えて骨ばっかりでした。畑には人參も大根もあるので、盗って食べればよかつたのに、それができんじやつたでしょ。どこかの家の前に立って、物をいしてもよかつたんです。それもできんかつたでしょ。こつちも（ウ）、手を合わせながら、みんな泣いとりました。この間も、虫払いのために田にはいりましたが、虫ばかりで、田の水は濁って、まるで醬油を煮返した^{たごつ}、熱かつたです」

男は溜息をついた。

七月になると、稲の育ちの悪さが明白になり、秋作の^Eソ^ンモウは必至だと、誰もが口にし始めた。

（^{ははきぎほうせい}帚木蓬生『天に星 地に花』より）

【語注】 * 1 袷単衣……………裏地をつけた着物。

* 2 甚八……………庄十郎の兄。

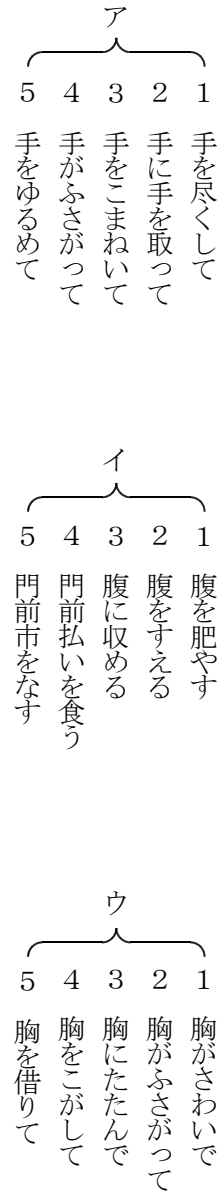
* 3 つる婆さん……………鎮水に長く仕え、家事、雑用の一切を切り盛りしている女性。

* 4 水呑み百姓……………田畑を所有せず、他人の田畑でやとわれている農民。

* 5 一斗……………「斗」は容量の単位。一斗は十升、約十八リットルに相当する。

問一 — A～Eのカタカナを漢字に改めなさい。

問二 (ア)～(ウ)にあてはまる言葉として最もふさわしいものを、それぞれの1～5から選び、数字で答えなさい。



問三 — ①「気休めに過ぎない」について、

I どういうことですか。二十字以内で説明しなさい。

II そう考える庄十郎に鎮水が教えた、それらの祭の意味はどういうことですか。六十字以内で説明しなさい。

問四 — ②「見えとつても見えん」とは、ここではどういうことですか。次のア～オから、最もふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

- ア 人間は、苦難に直面して心身の疲労が重なり、辛く厳しい現実から無意識のうちに目を背け、なかったことにしてしまう、ということ。
- イ 人間は、問題意識と知識を持って注意深く観察していないと、目にしている無数の現象から、重要な事実を見逃してしまう、ということ。
- ウ 人間は、目の前の仕事に追われていると、いつの間にか視野がせまくなり、物事の全体像や、本来の目的を見失ってしまう、ということ。
- エ 人間は、自分の仕事に対して強い責任感を持っていないければ、目の前に困っている人がいても気づかないふりをしてしまう、ということ。
- オ 人間は、遠くの出来事にも関心を持ち、人の話に耳を傾けておかなければ、事象の奥にある原因を見抜けなくなってしまう、ということ。

問五 — ③「皮肉な言い方」とありますが、男の言ったことの、どういう点が皮肉なのですか。三十字以内で説明しなさい。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

松前半島は山ばかりである。道は海岸を（ア）ようにしてついでおり、この道路のほかは海岸の自然はほぼこわされていない。松前町を出てほどなく車は西海岸を北上しはじめた。

左側に九月の日本の海の色がひろがっている。

天気はわるくないのだが、厚い雲が陽をさえぎっていて、空も海も淡い*1^{しや}紗をかぶせたように輝きをうしなっている。

午後四時ごろ、地図に小砂子^{ちいさいご}という①小さな活字が刷りこまれている土地を通過した。付近に人家は見あたらない。海にむかってなだらかな傾斜が落ち込もうとしている縁を道路が容赦なく切りとっており、そのあとわずかに傾斜をつづかせて、そのむこうは断崖になって大地そのものが海へすべり落ちていく。

その海に面した断崖上のわずかな傾斜地に、赤黒い土を露わにした考古学の発掘現場があった。車から降りてのぞくと、今日は発掘作業が休みらしく、（イ）がない。縄文時代の遺跡らしい。

北海道には旧石器時代後期からの遺跡が数多く発見されている。すでに発見された遺跡に関するかぎり、二万年ほど前から人間が住んでいたのである。

和人という、すでに本州で広域社会を形成していた闘争心のさかんなひとびとが組織的に移住しはじめたのは文献では十三世紀ごろからである。先住者として、へⅠへすでにアイヌが住んでいた。

最近の市町村の郷土史に対する態度は先住者としてのアイヌを尊重し、和人たちを割りこんできた者として冷静に位置づけている。松前町の天守閣の博物館も*2松前氏の盛衰^{せいすい}を物で見せるよりもへⅡへ古い時代のアイヌの暮らしを民俗資料によって語るというように重点がおかれているように思われた。

江差町が出している*3町勢要覧のパンフレットも、似たような態度をとっている。その冒頭に、

むかしこの地方（註・江差町）は、静かで、豊かな平和郷であったことが、町内から発掘される先住民族の遺物からうかがわれます。

しかし、約七百年前、本州各地の戦に敗れ、のがれてきた者や、難破船の漂流などで和人が住みつくようになって平和な社会が乱され、長い間先住民族と和人の争いがつづきました。

と、書かれている。② こういう姿勢で自分の土地の歴史を見るというのは、そのぶんだけわれわれの社会の（ウ）があがったとみていい。

へⅢへ厄介なことは、先住民時代が平和であったという規定が、③ 詩としてはわかつて、物事としては実証されにくいことである。

しかし概念的にはわかるような気がする。

小砂子の断崖の上で日本海を見ながら住んでいた縄文人のグループは、魚介や小動物を採つてくらす採集生活の徒であった。

その付近はへⅣへ清水があつたであろうが、小川はない。

その暮らしは小川を不可欠なものとしては必要としなかったからである。小川を欲しがようになるのは弥生式稲作農耕が入ってからで、水利をめぐって部落単位に争うようになった。

和人の基本的属性ともいふべき集団を組んでの闘争好きは——同種企業間の凄惨なあらそいぶりをみても——④ このことが基調になつてゐる。私が陸軍の*4 初年兵にさせられたときに目をみはるほど驚いたのは「隣りの*5 内務班に負けるな」という指導であつた。班内の掃除、整頓、訓練、あるいは舎前の整列のスピードから飯上げの速さにいたるまですべて五十人単位の隣りの班との苛烈な競争であつた。隣りの班が敵よりも（エ）であるという教育原理（もしくは方法）はやはり水田農村の型だとおもつた。

この痛烈なほどの一種の社会原理は、こんにちでも農村にのこつてゐる。一つの思いこみとして、隣りの村は世界中のどこよりもいかがわしく、悪念と悪謀に満ちた人間のむれで、油断をしていれば何をするかわからないという解明不要の心理が心のどこかにつねに蟠つてゐる。

紀元前三世紀に北九州で成立した弥生式農耕がたちまち山陽道に普及し、さらに東へひた走るようにしてひろまつてゆく時期は、かならずしも隣村との水利争いはこの社会の重要な要素でなかつたらうと思われる。人口が膨張したぶんだけつぎつぎにあらたな河川をみつめて耕作集落をつくつてゆけばよかつた。このひた走りの勢いが現在の青森県に達するまでに四百年を要しなかつたのではないか。

⑤ 紀元三世紀あたりから定着期に入つたかと思われる。同時に同地域内の諸集落間における水利あらそいが深刻になり、他集落に對する*6 猜疑と競争心というものが、集団の性格を決定つけた。

『江差郷土史年表』という便利なものがある。

それによると、和人が集団的にやってくるのは平安時代の終末期であるとしている。源頼朝が、義経追討に名をかりて奥州藤原氏

(泰衡)を討伐し、その勢力を一掃したとき、いまの青森あたりにいた奥州藤原氏の一勢力が、津軽海峡をわたって、吉岡(松前半島の福島町付近)、福山(松前町)、江差に上陸した。文治五年(一一八九)のことで、

これを渡党という。

と、どの北海道史にも書かれているように、右の『年表』にもそのように書かれている。

この時期から、広域社会の経験者で、しかも鉄の兵器をもち、かつ力の信奉者である和人たちが、採集という一種無競争の社会をつくっていた。^⑥先住民の秩序体系をみだしてゆくのである。(司馬遼太郎『街道をゆく15 北海道の諸道』より)

【語注】

- *1 紗……………うすい布地。
- *2 松前氏……………松前藩を領有した大名。
- *3 町勢要覧……………その町の人口、産業、資源などの要点をまとめて見やすく示した本。
- *4 初年兵……………軍隊に入って、一年に満たない兵。
- *5 内務班……………軍隊で、兵が生活する組織。
- *6 猜疑……………人を素直に信用せず、疑うこと。

問一 (ア) (イ) (エ) にあてはまる言葉として最もふさわしいものを、それぞれの1～5から選び、数字で答えなさい。

ア

5	4	3	2	1
むさぼる	縁どる	折り曲げる	うちよせる	いろどる

イ

5	4	3	2	1
余裕	由緒	人影	すき間	おもしろみ

ウ

5	4	3	2	1
民度	経験値	難易度	期待値	温度

エ

5	4	3	2	1
味方	不幸	花	敵	重要

問二 ― I 〱 IV 〱 にあてはまる言葉として最もふさわしいものを、次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア あるいは イ いうまでもなく ウ ただ エ むしろ

問三 ― ① 「小さな活字が刷りこまれている土地」とありますが、筆者はこう書くことによって、読者に何を伝えようとしていると考えられますか。簡潔に答えなさい。

問四 ― ② 「こういう姿勢」とは、どのような姿勢ですか。本文の言葉を使って説明しなさい。

問五 ― ③ 「詩としてはわかってても、物事としては実証されにくい」とありますが、これはどういうことですか。その説明として最もふさわしいものを、次のア～オから選び、記号で答えなさい。

- ア そうであつたらいいと願う気持ちはよく分かるが、誰も信じてはくれないだろうということ。
イ そこに住む人々が勝手に想像することは自由だが、そこには何の根拠も見出せないということ。
ウ 民間の伝承として楽しむことはできても、学問として研究することは難しいということ。
エ 研究は文学作品として高い価値を持っているが、学問としての価値はほとんどないということ。
オ そうであつてほしいという想像はできても、発掘などによって証明するのは難しいということ。

問六 ― ④ 「このこと」とありますが、これはどのようなことですか。説明しなさい。

問七 ― ⑤ 「紀元三世紀あたりから定着期に入ったかと思われる」とありますが、何が「定着期に入った」のですか。本文から五字でぬき出して答えなさい。

問八 ― ⑥ 「先住民族の秩序体系をみだしてゆく」とありますが、これは具体的にはどういうことですか。説明しなさい。

三

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

- ① 戦後七〇年、科学は飛躍的に進歩しましたが、同時に軍事研究にも最新の科学が導入され、多岐にわたる兵器開発が行われています。その実態がどういふものなのか、私なりに探ってみたいと思いますが、その前に、科学と人々の関係についてお話ししておく必要があるでしょう。科学を取り巻く世界が、時代とともに急速に変わりつつあることを皆さんに知ってほしいからです。
- ② 私が子どもの頃は、『ノンちゃん雲に乗る』（一九五五年公開）などの映画を見にいくと、初めの一〇分くらいはニュース映画をやっていたものです。そのニュース映像の中に、髭を生やした考古学者の教授が助手二、三人を連れてのんびりと発掘作業をしている場面がありました。
- ③ そんな光景は今ももう見られません。今の考古学はシステマチックになっていて、そんな小規模の発掘作業などほとんどありません。何百人もの人手を集めて一列に並んでピーツと笛を鳴らすと作業始め、何か発見されると確認のためにまた笛が鳴らされ作業ストップ。こうして考古学の分野は、金も人手も手段もどんどん大掛かりになっていっています。
- ④ 科学の研究も同じです。大掛かりな手段でデータを取れば、それよりもさらに規模を拡大しないと次の研究ができない。だから必然的に①科学というのは巨大化せざるを得ないのです。
- ⑤ するとどんなことが起きるか。巨大化した科学が、人々の生活からどんどん遠のいてしまうのです。昔は、テレビの裏蓋を外すと、中に真空管が入っていて、我が家のは一七本入っている「一七極テレビ」でしたが、配線板も配線図も表示してあって、私のようなラジオ少年にはその仕組みが大体分かったものです。けれど、今のテレビは「二千万*1トランジスタ」です。今、テレビが壊れた、パソコンが壊れたといつて、自分で直せる人がいますか？電気屋さんでも直せませんし、電子工学科の教授だって直せない。下手にいじれば壊してしまう。直せるのはそのメーカーの限られた専門家だけです。科学が人々の生活から離れ、本来より難しいものになりつつあるのです。
- ⑥ これを私は「科学疎外」と呼んでいます。科学を利用する市場経済ばかりが膨張し、その成果を人々は一応享受しているわけですが、その科学の有用性を理解している人がいるとはとても思えません。一般市民は科学にどんどん置いていかれるばかりです。
- ⑦ 一般市民ばかりではありません。実は当の科学者自身でさえ、巨大化した科学の中で、研究が分業化、細分化されて、自分が行っている研究が、一体どんな目的でなされているのか、その全貌が良く分かっていない場合が多いのです。
- ⑧ 我々の素粒子の実験で言えば、一〇〇〇人くらいの人間が一つの論文を書いています。五ページくらいの短い論文にも、大げさ

ではなく、本当に一〇〇〇人の名前が連なっているのです。

9 例えばこんな話があります。あるとき、ドイツのある町で研究グループのミーティングをやると言うので、その会議に参加するために現地へ向かいました。その町の駅前で出会った人に、ミーティングの会場のある村への道順を尋ねたら、こっちだと言って歩き始めた。しかし、教えてくれるのはいいけれど、いつまで経っても彼は私と一緒に歩いている。そうこうするうちに、そのまま会場に着いてしまいました。そこで初めて、彼が私と同じ研究グループの仲間で、論文の共同執筆者の一人であったことが分かったのです。② 同じグループで同じテーマで論文を書いているのに、お互いに顔も知らなかった。こうした話を良く耳にします。

10 たまに海外ミーティングをやることはあっても、自分のテーマと仕事が決まれば、さっさと自分の国に帰ってそれだけに専念する。言わば、そうしたたくさんの小さな生命体みたいなものが有機的につながって、一つの仕事をこなしている、そういう感覚でしょうか。ですから、その中の一つの生命体がやっていることだけを見ても、全体像が見えないのです。こうした傾向は他の研究分野でも起こっているはずです。

11 (A)、科学のブラックボックス化が進んでいると言っているいいでしょう。科学だけではありません。二一世紀に入り、我々の社会はますますブラックボックス化され、誰がどういう仕事を何のためにしているかということが把握しにくくなってきています。

12 科学が一般の人々の手から遠ざかり、研究者さえも巨大化した科学の行先が見えなくなってきた。その裏には巨大な資本が動いています。戦後、何が大きく変わったかと言えば、国家による強力な科学技術政策の推進もありましたが、何より顕著けんちよだったのは、科学研究に対するかつてない産業資本の投資と、その結果の商品化です。

13 つまり、科学政策の中に市場原理が根深く入り込んできている。そのため、純粋な科学研究が市場原理に左右され、研究者たちがマネーゲームの中で翻弄ほんろうされている、というのが今の実態です。

14 (B) 大学における研究でも、今や一年ごとの短期のサイクルでしか研究費が下りないという現実があります。ある研究テーマで研究費を取ろうと思うと、研究計画を出し、一年ごとに中間報告を提出し、その結果を出していかないとお金が下りないのです。

15 昔は、政府から講座研究費という研究費が下りていて、「この研究はちょっと冒険だけれど、結果が出せたら非常に面白いことになる」というようなリスクのある研究も、ある程度長い *2 スパンで取り組むことができたものです。今はそれができない。すぐ役立つ結果を短いスパンで求められる。

16 学内の雰囲気を見ても、若い研究者たちがそうした ③ 余裕のない汲々とした空気の中で仕事をしている感じが伝わってき

ます。短期に結果を求められる成果主義の中で行われる研究内容には、あまりロマンも好奇心をそそのめ、冒険心も感じられません。市場原理の鉄則は、ご存知のように「選択と集中」です。まんべんなくお金をばらまくのではなく、儲かりそうなところにピンポイントで資金を集中させる。しばらくお金を投下して、これはダメだと判断したら、さっと資金を引き揚げる。引き揚げた後は知ったことじゃない。そしてさらに鉅脈のありそうなところに資金投下する。そうやって大きな利益を上げていくのが、「選択と集中」の仕組みです。

[18] 科学の世界もどんなこの「選択と集中」の方向性が進み、大きな利益が得られそうな分野には大金が投入され、地味で儲かる見込みのない分野には資金が回らない仕組みが常態化しつつあります。各分野の研究で、どう研究資金を確保するか、それこそ研究そのものの死活問題でもあるのです。

[19] (C)、科学の分野でいかに「選択と集中」を試みても、どの研究が成功して大きな利益を生むかなんて、前もって誰が分かるかと言うのでしよう。名古屋大学で^{*3}赤崎勇氏や^{*4}天野浩氏が研究していらした青色LEDは、地道な努力と一五〇〇回以上の実験の失敗を重ねた末に、見事花開いた発明です。

[20] その偉業でノーベル賞を授与されたから、皆さん大騒ぎしていますが、実験が成功するまではほとんど誰も興味を向けない、小さな研究でした。研究資金が潤沢であつたわけでもなく、苦しい中で節約しながら細々と研究を続けてこられたのだと思います。

[21] このまま科学の世界でさらに「選択と集中」が進めば、人気のある分野だけに資金と人材が集まり、地味で手間のかかる小さな研究は、真っ先に切り捨てられていくでしょう。それで一体何が残るのでしょうか。

[22] 人間が「選択と集中」の名のもとに科学を追求すればする程、私には^④本来の科学の姿がどんどん遠くなっていくように思えてなりません。

(益川敏英『科学者は戦争で何をしたか』より)

【語注】*1 トランジスタ……………電流の増幅やスイッチの働きをする部品の一つ。様々な電子機器に用いられている。

*2 スパン……………期間。

*3 赤崎勇……………工学博士(一九二九年)。二〇一四年ノーベル物理学賞を受賞。

*4 天野浩……………工学博士(一九六〇年)。二〇一四年ノーベル物理学賞を受賞。

問一 (A) ～ (C) にあてはまる言葉として最もふさわしいものを、次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア しかし イ 例えば ウ なぜなら エ ところで オ つまり

問二 —— ① 「科学というのは巨大化せざるを得ない」とありますが、巨大化した科学はどのように変化しましたか。 [1] ～ [6] の内容をふまえて、五十字以内で説明しなさい。

問三 —— ② 「同じグループで同じテーマで論文を書いているのに、お互いに顔も知らなかった」とありますが、これはどういうことを表していますか。四十字以内で説明しなさい。なお、解答にカタカナ語を使つてはいけません。

問四 —— ③ 「余裕のない汲々とした空気」について、なぜこのような空気になっているのですか。その説明として最もふさわしいものを、次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア 政府の科学技術推進政策によって、人気のある分野の研究だけに資金と人材が集まり、不人気分野の研究には資金が回ってこないから。

イ 以前は、講座研究費というものが政府から支給されており困難はなかったが、国の財政状況が悪くなり、科学研究の予算が限定されたから。

ウ 儲かりそうなところに資金を集中して、あとで成功かどうかを判断する方法には、ロマンや好奇心をそそる冒険心が感じられないから。

エ 現在の巨大化した科学研究は、産業資本の投資に頼らざるを得ず、短い研究期間で商品化という結果を企業から求められてしまうから。

オ 限られた予算から分配される資金の中で、どうにかして研究に必要な費用を確保しなければ生活してゆけず、死活問題となるから。

問五 ———— ④ 「本来の科学の姿」として、筆者の考えにあてはまらない事例を、次のア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 日本のスーパーコンピュータの分野はかつて世界一だったが、次第に資金が減らされて、国際競争力を失いつつある。
- イ 作りが単純な昔のラジオは、配線を確かめるとどこが故障しているかわかるので、簡単に修理することができた。
- ウ 電話の発明の父であるグラハム・ベルは、わずか数名のサポートによって「電話」を作り上げたと言われている。
- エ 生命科学に興味を持ち、大学でiPS細胞の研究を細々と続けてきた結果、様々な分野で応用できるようになった。
- オ 有人ロケット開発は、膨大な時間と労力と資金を必要とするにも関わらず、成功に終わるとは必ずしも言えない。

問六 本文についての説明としてふさわしいものを、次のア～オから二つ選び、記号で答えなさい。

- ア 筆者は②から③で考古学の例を出すことで、科学に詳しくない人も科学の話を身近に感じることができるようになっている。
- イ 「科学疎外」とは、同じ分野の専門家であっても、お互いにわからないことがあることだと、筆者は⑥で述べている。
- ウ 本文を、意味のまとまりによって三つに分けるとすれば、二つ目のはじまりは⑦である。
- エ 筆者は⑫から⑬で、科学研究においてどの分野が成功するかわからないので、平等に予算を拡大すべきだと述べている。
- オ ⑭から⑲の内容に小見出しをつけるとしたら、「科学の世界に根を下ろす『選択と集中』」というものが考えられる。